

登山における「リーダー」

—ヨーロッパと日本における意味格差から—

●2019/7/24 T・K

人々の名誉を損なえば、あなた自身も他から同じ目に遭う。

だが、優れたリーダーなら、言葉はわずかで、

リーダーの仕事が終わり、目的が成就された時には、

みんな「自分たちでやったんだ」と言うだろう。(老子)

——Mountaineering (6th ed.) “Leadership” (p.430) から私訳

まとめ

A. 一般的な語源・定義と「登山のリーダー」の成り立ち

- 1) 一般的には「リーダー」とは、団体や組織など「集団」の先頭に立って一群・一団を統率し、先導する役割を担う者のことで、指揮官、指導者、首領などがこれに当たる。原始社会や古代では、集落・部族社会などにおいて、狩猟や、外敵からの防御、あるいは集団内部の取りまとめなどで、トップの座を託された者（長＝おさ；頭領・頭目）を指した。
- 2) 「集団」は複数人で構成され、メンバーで目的を共有し、相互で結び付きを持つ。
- 3) リーダーに対しては、その他の多数者である「フォロワーfollower」（メンバー、構成員、同行者、従者、属者、同士、同志、団員、隊員）が存在する。
- 4) 英語の‘leader’の持つ語意に対して、日本語の「リーダー」には、その語単独で「登山隊の隊長」という意味があるようだ（英語にはないので、その限りでは和製語か？）。
- 5) 登山史上、登山に「リーダー」がいるようになったのは、登山が「集団」で行われるようになったことと不可分である。登山史をさかのぼると、集団登山も登山のリーダーも、近代登山としてアルプス（スイス）登山の幕開けを起点に生まれたと推測される。
- 6) 「登山（隊）のリーダー」は、集団での登山において「リーダー」役を託された特定者である。登山のリーダーには、目的の遂行（予定の日程・行路での登頂や縦走）もさることながら、それ以上に登山隊・同行者に対する特別な安全配慮の義務がある。
- 7) わが国の登山は、古くは奈良～平安朝時代から宗教登山（講中・信仰登山）として行われ、中世以降も戦国・江戸時代にかけて登山は行われた。集団での登山だったと推測されるが、本格的な近代登山は 20 世紀前後に西欧からもたらされた。活躍した日本人登山愛好家も少なからずいたが、日本山岳会（1905 年に創設）、大学山岳部を中心に登山界が牽引され、組織登山の発展・普及とともに「リーダー」の理論・役割も確立されていった。

B. 一般的な登山の「リーダー」

- 8) 山岳会や登山同好会でを行う比較的小さな登山では、まず登る山の推薦・発案者が山行の

担い手（リーダー）になることが多い。

9) 山のレベル、登路（ルート）、季節や目的に応じて登山は多様であるように、リーダーも、リーダーが担う役割も違って来る。だから、それぞれの登山の対象（山）、難易度や目的などに応じて適任者がリーダーに就くのが望ましい。

10)（営業＝ツアー登山は全く別だが）組織・山岳会の登山のリーダーは、登山の同行者（参加メンバー）に対し、登山へのモチベーションを高め維持するよう心理的な支援や、装備、訓練、安全確保などのための考え方、技術面などの支援、指導を行う。

11) 登山のリーダーは、行動中における登山隊の隊列の統制や進行の管理・指揮を主任務とするが、西欧の登山界では隊の安全確保をより優先させる思潮がある。これは、西欧の登山が危険な冒険登山として開拓され、今日もその基本的立場を継承しているからである。日本と西欧で「登山」、「リーダー」の概念も位置づけ（リーダーシップ）も異なる。

12) フォロワーはリーダーの指示・指揮に従い、全体のために与えられた役割・務めを誠実に果たすとともに、全体の調和を乱す言動などは最大限慎むべき義務がある。

C. わが山の会における「リーダー」

13) 本会における「リーダー」の位置づけは特殊である。「山行の担当者」とも呼び習わしており、山行のお膳立てをし、実際の山行全体を取り仕切るが、半ば添乗員的な立場に立つこともしばしばある。

14) 本会は会の創立以来、会員負担の平準化を図るために、登山経験や会員歴の長短にかかわらず、山行のリーダーもできるだけかたよりなく担ってもらう方針をとってきている。

15) その限りで、登山の技術・経験値において不十分なリーダーの任用も避けられないことがある。それらに対しては、経験・実績あるサブリーダーが随行し、リーダーの不備を補ってもらうように対応している。

16) 山行のリーダーは、山行の計画の策定・提案から登山終了までの全行程にわたる進行管理を担うが、最終的には「報告」を会報・HPに提出して役割が完結する。

17) フォロワー（同行者、参加者）は、リーダーに全権委任をしたものと理解される。リーダーの指示に対して、反対意見は最小限に控えるのがマナーである。

18) リーダーはサブリーダーをはじめメンバーと適宜、意思疎通をし、相談をし合う。

D. 理想的なリーダー像とリーダーの責任

19) 優れたリーダーは、同行者（隊員、フォロワー）の希望や気分、体調などを敏感に汲みながら、全体として登山が順調に進むように見守る役に徹するもの、とされている。各自の個性・人格・意向を尊重し、それぞれの自主性・主体性や能力が発揮されるように手を添え、指示や指令は最小限にする、というのが、リーダーの理想像とされる。

20) 経験・技術のあるリーダーが未経験者・初心者を不相応に危険な登山に参加させ、もしくは危険な箇所に必要な注意を怠ったため事故が生じたような場合には、リーダーの注意（結果予見・結果回避）義務違反となる可能性がある。山岳会主催の登山でリーダーに重大な過失（注意義務違反）があったときは、「業務上の過失」となりうる。

§ 1. 語源から見る「リーダー」論

はじめに

| 3

不学にして、「登山のリーダー」の英語圏での意味と日本語圏での意味とが大きく違うということを、私は知りませんでした。今回の資料作りをきっかけに、世間一般の「リーダー」からスタートして「登山のリーダー」の意味を尋ね探すうちに、普通に「登山」と日本語で言う場合の、広範で曖昧な定義とは異なり、ヨーロッパで「登山」と言う場合は、最低でもスイス・アルプスレベルの山や、難ルートの冒険的な登山を指す、ということがしだいにわかってきました。海外では登山はクライミング（climbing；今ではイタリア・ドイツなどの岩峰の登攀も含むようです）なのであって、前提や範疇が全く違うのです。

そこからさらに、登山のリーダーの義務・責任も、海外と日本とは必然的に違うだろう、違わないはずがない、ということが推測されるに至りました。ヨーロッパで言う「登山」は、富士山レベルの登山さえ範囲から除外するほどに高度かつ先鋭的な活動内容を指すもののようなのです。そこにおけるリーダーならびにリーダーシップ（リーダーの心得や権限など）も、はるかに厳しい内容を求めているらしいことがわかってきました。

登山を指す英語は‘mountaineering’ですが、言葉はそうであっても、その中身は全くと言ってよいほど異なり、ヨーロッパで「登山」と言えば、ハイキングやトレッキング（「アルプスの少女ハイジ」の世界）は最初から含まず、一定レベル以上の冒険登山だけを指すということに、改めて思い至りました。「登山」という活動ジャンルの発生史・発展史と密接に関連するためです。ヨーロッパにおける近代登山の幕開けはモンブラン登山ですが、向こうとこちらの「登山のリーダー」観を見ると、相互の背景や歴史がこのように違っていることに思いをいたす必要があります。登山論・リーダー論を日本山岳界、そして自国レベル中心で理解しようとするのは、独善的に過ぎますし、比較文化論（同一の文化的対象・テーマ

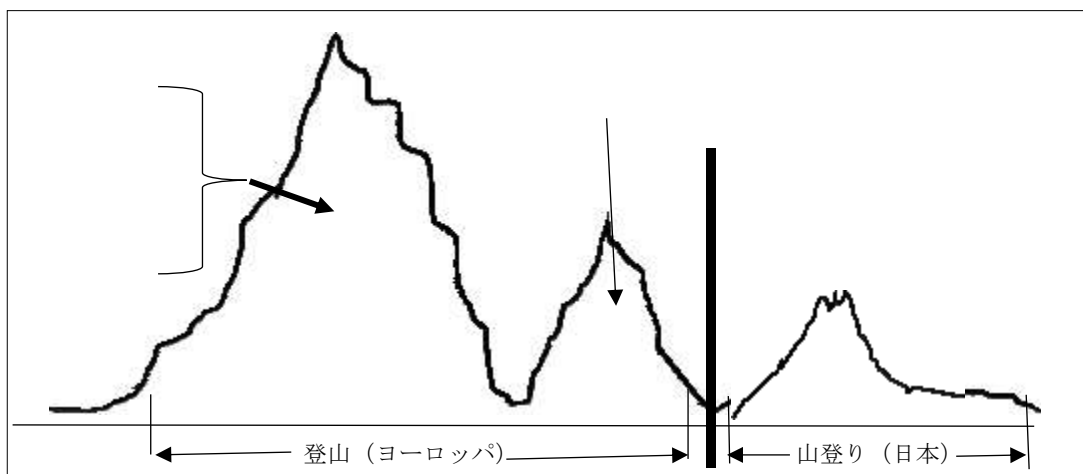


図1 ヨーロッパ（人）と日本（人）における「登山」の範囲

を2か国以上の間で比較して論じる学問) 的観点からも意味を損ねる危険性があります。

このように見てくると、日本での「登山」で言うなら、厳冬期の南・北アルプスカ、谷川岳や唐沢岳北壁、北鎌尾根など、私たち一般の登山者にははるか上のバリエーションルートの登山くらいが、ようやくヨーロッパの「登山」のレベルに並ぶうのではないかと思います(図1)。その限りで、多くの日本人が普通に行っている登山は、西欧から導入したものの、欧米で言うところの「登山」とは種類を異にし、むしろ日本人が20世紀初頭から独自に培ってきた、山の領域を対象とするレクリエーション活動の1つとして考えるのが妥当だと思います。そこにおけるリーダーも当然、異質のものなのです。

以上を念頭に、下記を読んでくださるようお願いします。

1) 「リーダー」の一般的な意味と「登山」における意味

私たちは「リーダー」と言えば「登山での『それ』」とすぐ了解しますが、英語の辞典(三省堂版ほか)では‘leader’に『登山隊の』リーダー」という意味は与えておらず、あくまで「先導者、指導者、指揮者／群れの先頭に立つ牛や羊／新聞の社説」といった語意なのです。登山に無関心な人に聞いてみても、登山に特定した意味はないと思う、と言います。普通の市民の言語感覚からして、リーダーとは、企業や社会組織・団体などでイニシャチブをとり指導力を発揮している人を指し、その限りの意味にとどまるようです。

なお、ここで問題なのが、リーダーは個人がみずから志望し、または努力や競争を通して勝ち取った社会的地位(ポジション)なのか、集団の中から推挙・選任されたものなのか、どちらなのか、という点です。重要な側面ですが、ここでは立ち入らないことにします。

一方、登山関係の英文のガイドブック(5～6年ごとに改訂される専門書“Mountaineering”の6th Ed;本版は1997年刊と古い)には、‘Emergency Prevention and Response’(遭難

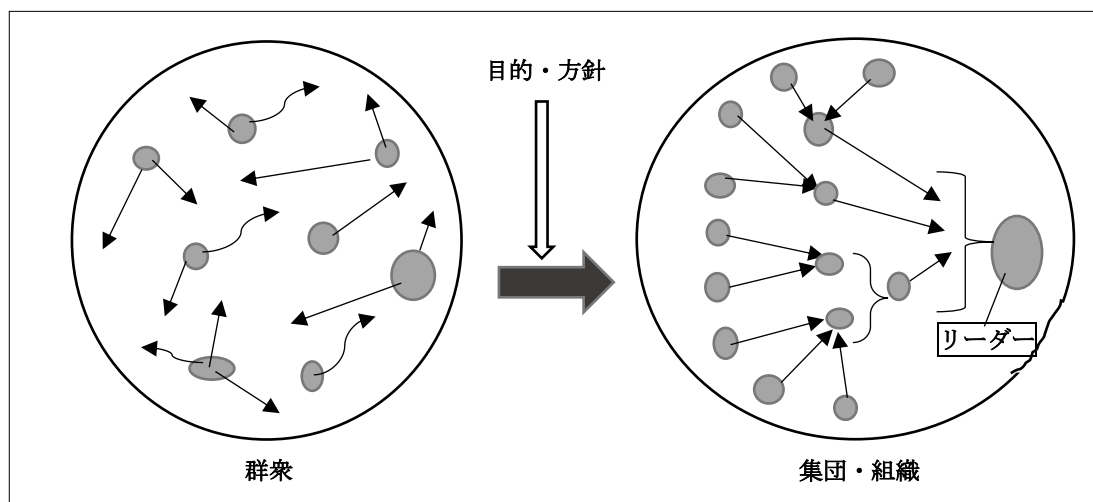


図2 群衆(無秩序)と集団(秩序)

群衆では構成員の気持ちも役割もバラバラだが、ここに共通の目的と方針がひとたび与えられると、リーダーの統率力が関与することによって、メンバーの気持ちと能力が1つに合わさる。

防止とその対応)の部(第5部)に‘Leadership’の章が置かれています。ここでは「登山の(における)」を冠さずに、‘leader’の用語が独立語として普通に使われています。登山の専門書だからにしても、確立された用語として示しています。他方、かなり古いのですが『広辞苑』(1967年版)を見てみると、「リーダー」に「登山隊の隊長」と第2項で与えています。日本語のほうがより明確に、「リーダー」について登山における引率者・先導者という独自の意味として押し出しているように見受けられます。 | 5

言葉の変遷や多義化(意味の分化、枝分かれ)は、込められた中身(文化・文明や生活様式など)自体の変遷や発展、分化の歴史を示唆します。「リーダー」とはそもそもは古代の部族社会において自然発生的に生まれた役割者で、今も未開の部族社会などで呪術をものする「長(おさ)」などに見られますから、昔からあった言葉のはずです。

これが以降、集団の中のトップの役割者の意味でずっと使われてきました。これに、そこに時代をはるかに経て「登山におけるリーダー」の意味が加わるわけです。何千年という長い時間を必要としたのは、「登山」という新たな活動ジャンルが見いだされ、確立されるまで待たなければならなかったからです。「登山のリーダー」の意味は時代が生み出したのです。

2) 登山史に見る「集団登山」の起こり

①ヨーロッパの場合

ここには、登山史上のある段階において「リーダー」を必要とする登山スタイルが生まれ、同時にリーダーという役割者(イニシヤチブをとる者)が出現したであろうこと(どちらが先かはわかりません)が推理できます。集団という形式をとってでないと登れない山が、現実の登山の対象として世の中のある種の人たちから注視され、その登山が模索され始めたのです。後述しますが、見向きもされなかった高峰を登山の対象とするという新機軸は、時代の新しい波の影響によって初めて生まれるべくして生まれたのでした。

上述のようにリーダーは「集団」につきものです。先立つ試み(試登)も数多く行われたようですが、話を早く進めるために、登山スタイルが集団形式をとるようになったところの先駆的な登山から登山史をひも解くと、2つの象徴的なエピソードにぶつかります。それら代表的な2つの登山で新たな登山の幕が切って落とされます。1つ目は「近代登山」の、2つ目は「アルパイン登山(アルピニズム)」の先駆けとなりました。

1つ目は、1786年のモンブラン(ヨーロッパ最高峰)登山です。それまではアルプスの高峰は「悪魔の棲む場所」として人々に恐れられ、(中世的な宗教の呪縛からも)近づく者はいなかったとされていますが、この登山によってアルプスの高峰がまさしく開闢かいびやくされ、山の冒険行が幕開けされます。そして2つ目が、それに遅れること約80年、エドワード・ウィンパーの8回目の挑戦にして成った、1865年のマッターホルン登頂です。下山で4人の犠牲者を出すという艱難の末、成し遂げられたこの登山が、大部隊・大集団によるその後のヒマラヤ・アンデスなどの組織登山の形式を基礎づけ、アルピニズムという高度な登山戦略や技術面・装備面において20世紀からの冒険的高所登山へのレールを敷いたのです。

「登山のリーダー」という概念は、この時期を境に世に出たであろうこと、登山の規模やスタイルが変化・発達するにつれて確立されていったであろうことが推測されます。1950年に人類史上初めての8千メートル峰登頂の偉業を成し遂げたフランス隊を率いたモーリス・エ

ルゾグは、「登山隊の隊長」としてフランス山岳会から推挙されています。

登山史に輝かしい名を残す、登山計画の発案者・戦略家であって、登山技術の考案者、先導者、すなわち実質的なリーダー（モンブランには登頂者はジャック・バルマらがありますが、登頂者に懸賞を出したド・ソシュールが登山の発案者としては有名で、マッターホルンにはウィンパー）がおり、ロープでつながり隊列（チーム）をなして登山が行われました（ウィンパー『アルプス登攀記』、岩波文庫）。

ここで、登山の発展を担う精神的な背景となった、そのころの時代状況も一瞥しておきます。市民革命（1642～60年の清教徒革命、1789年のフランス革命）や産業革命（1760年ごろからの約100年）が特記されるでしょう。登山の開花期と時期がオーバーラップしているのは偶然ではなかったでしょう。近代登山の芽生えは、ヨーロッパが封建社会から抜け出して、市民の自由・権利の制度的な確立、意識の変革、さらに産業・文化の発達と並行するとも言われています。登山史上で中世の封建的な、また宗教的な呪縛から人々の心が解放され、山の悪魔さえ相手に回すことになった精神的な変革は、天動説を打ち砕いた地動説（コペルニクス、ガリレイ）の勝利（コペルニクスの転換）に匹敵するかもしれません。

②日本の場合

一方、日本ではヨーロッパよりもはるかに早く、奈良・平安朝時代（8世紀）から各地の山々が宗教登山（修験者による行者登山や大衆信者による講中登山）として登られました。今日も「霊峰」とされる山々が各地に点在するのは、その名残です。

『劔岳点の記』（新田次郎）で有名ですが、測量技師の主人公・柴崎芳太郎が劔岳山頂で見つけた錫杖の頭部と槍の穂先は奈良時代のものと言われますし、富士山もすでに平安時代に登られているそうです。その後、中世以降から戦国時代にかけては軍事上の要路・要衝を探るために、あるいは交易路を開くために山が登られました。日本の山々は平野、盆地、集落を隔てる高い境界をなす代わりに、今も有名な「峠」に名を残す場所が少なくありません。山が登られていた確かな証です。江戸時代になると諸藩の藩図確定のために山が登られ、庶民による講中登山も盛んになったと言います。槍ヶ岳は1828年に開山されています。

これらは「集団」で行われた登山に違いありませんが、現在に続く近代登山の様式は、イギリス人宣教師、ウォルター・ウェストンによって19世紀末から20世紀初頭にかけてもたらされました。そのころの登山の先導者は地元の山を知悉する「道案内人」（猟・漁師などの生活者）であって、ここで取り上げているリーダーとは意味合いが異なったようです。

わが国における近代登山の幕開けも明治期の文明開化後であり、西欧の登山とは時代が大きく違っているものの、封建社会から抜け出たという時代の特徴は、西欧における近代登山の黎明期と類似するところがあるように思われます。

このように見てくると、私たちが何気なく使っている「登山のリーダー」という言葉には、一般的な「リーダー」とは違った意味合いとして登山で慣用されるようになり、何重にも込められている時代的な、また登山スタイルの変遷を経た背景があることに気づかされます。後述するように、ヨーロッパから導入されたけれども、日本の山岳状況から生まれ、日本で独自に育んできた登山スタイル、それに合ったあり方が確立されていった、という見方が成

り立つなら、ヨーロッパで言うのと日本の登山界に定着したリーダーとで、定義・役割が大きく異なっても違和感はありません。

それにもかかわらず、今日の登山において共通するリーダーの特性で最も重要な点は、やはり登山が生命の危険（死）をも覚悟で選択する活動ジャンル・領域であり、その任務や役割において、リーダーは一般で言うのとは異なる注意義務（安全管理*義務）が課される、とする登山界の合意にあると考えられます。この基本は国間で変わらないと思いますが、どこまで厳格に当てはめるかとなると、国柄が出ます。日本の登山におけるリーダーにあえて「登山隊の隊長」の定義を与えた根拠も、この辺にあるのではないかと推測します。

| 7

***安全管理と危機管理：**安全管理は、職場や特定の活動現場で生じる危険・事故などに対して、その予防に努め、安全な状態を維持するように監視・対策を講じること。反対が危機管理で、危機的状況や危急の事態が発生した場合に、その被害や影響を最小限にとどめるように備え・対策をすること。本来、危険が予測される登山では、事後の救助以上に、事前の訓練や装備、細かな注意など予防的な処置・備えが重要です。しかし、危険は用心すれば必ず防ぎうるものかと言うとそうではないため、危険が現実のものとなったときの対応（危機管理）も欠かせません。それぞれで技術や方法論は異なりますが、普通、事故発生後のほうが予防よりずっと大がかりな対応を要するものです。

■リーダーと政治

やや自嘲的に言えば、日本人は「隊」といった上下、主従を固定する関係がことのほか好きのように感じます。モーリス・エルゾグの『処女峰アンナプルナ』などを読んで感じるのは、隊員たちの個性の発現、無理のない自由の空気とリラックス感とでも言うのか、それぞれの隊員が隊の中であって非常に和んでいる、隊の持つ環境・気風、そして上下関係のないおおらかさがあり、これが当たり前のこととして登山隊員の意識にも、そこでの生活にも浸透している、ということです（13 ページ参照）。リーダーを考える際に、この点はきわめて重要だと思います。どういう雰囲気や隊に与えるのかにリーダーがかかわるからです。

余談になるのですが、原眞先生（医師の登山家）が生前に言っておられた印象深い話があります。「山の政治屋にはなるな」という言葉です。大の権威主義嫌いで、彼はその「政治屋」を嫌って日本山岳会を辞めたと語りました。日本の山岳組織（山岳会）だけでなく、登山隊（日本山岳会主催のエベレスト登山隊）の中にも持ち込まれた組織統制（登山における政治）が、登山家の小西政継（山岳同志会を立ち上げた人；故人）を日本山岳会から去らしめました。彼は民間から請われてエベレスト登山に参加したものの、極地法による大部隊登山で指揮系統からルート工作と荷揚げの役にさせられたうえ、アタック隊から外されて、自分の登山がさせてもらえなかったのです。日本社会には、そのような陋習があちこち残っている気がするのです。リーダーを考える際に、私の頭からどうしてもこの点が拭えません。

リーダーは山で「まつりごと＝政治」をものする立役者です。山行が整然と実施されるためには、リーダーの働きは欠かせないでしょう。しかし、山行が必ず楽しいものになるかどうか、成功した登山になるかどうかは、統制とは関係がないように私は思います。1 ページ目の冒頭で引用した言葉のように、リーダーの発する、リーダーとしての言葉も控えめでよく、これが、リーダーたる者の真骨頂ではないか、と思います。それは考えてできることでなく、そこにある人柄がなしうるものではないかという気がします。

3) さまざまな領域や段階に置かれる「リーダー」格

初めから少し横道に逸れますが、彼我の違いを、言葉の違いで見ておきます。

「隊」という漢字には、「隊列（列をなす集団）」という一般的な意味と、「軍隊・部隊（軍事目的での人的編制）」という軍事の意味の 2 つがあります。日本語では「リーダー」に軍隊の統率者や指揮者の意味も含めるようですが、英語では軍事組織・軍隊で指揮をとる者を、**leader** ではなく **commander**（または **officer in command**）という別の語で表しています。 | 8

また軍の用語としての「隊」というときも、日本語には隊列、隊伍、部隊、軍隊、大隊、小隊など「隊」をつけただけのバリエーション語しかありませんし、登山用語にも「隊」が使われるという、言葉の分化レベルとしては未成熟な経過をしかたどっていません（それだけ実質社会＝軍、軍事〈兵〉学も登山学も日本では未発達で貧相だったのでしょうか）。

一方で、英語ははるかに複雑に言葉が分かれています。少し調べてみただけでも、例えば **army**（陸軍、軍全体）、**forces**（軍隊）、**troops**（兵隊）、**corps**（隊、一隊）、**party**（分遣隊）、**squad**（隊）、**squadron**（戦隊）、**battalion**（大隊）などがあります。私はそれぞれの意味の違いをよく知りませんが、言葉の枝分かれ、特殊に発達した言語の後ろには、その社会がその実体や装置を細かく有しているだろうことを知るにつけ、ただ驚くばかりです。

ついでに、エクスペディション（**expedition**）という言葉についても見ておきます。英語のこの語は、「征伐」「出征」などの軍事的な意味は含まず、単に探検・研究で遠隔地に向かうこと、という平和的な意味です。ところが、この語を日本語に移し換えると、「遠征隊」（遠征は征伐のために遠地へ出かけるというのが第一義で、穏やかならぬ語意）になってしまいます。英語は軍事と非軍事をきちんと区分けして使っているのに対して、日本には軍民混合（軍の民間蔑視）の気風があるのでしょうか、今さらながら日本の文化風土について、後進的な側面を感じるしだいです。

本来の文化・文明は言葉を新たに生み出しながら発展・拡大していくものですが、言葉の未熟さを見れば、日本人は登山をも西洋から受け継いだのであって、自発的に開拓し創始したものではなかったことがわかるように思います。

4) ヨーロッパ登山における「リーダーシップ」と「安全管理」の関係

基本点を整理すると、登山におけるリーダーとは、①登山隊としての目的遂行と②登山隊員の安全確保（安全管理）という 2 つの重要な使命を負うことになります。①には登山の方法（技術・方法論）、装備、食事など登山を有効に進める物的な手段が含まれます。普通に考えれば、リーダーはこちらの方法論に含まれるように思えます。

ところで前に戻りますが、上掲専門書“**Mountaineering**”でのリーダーの位置づけはというと、登山遂行というもっともな①の目的からではなく、むしろ、その隊の安全確保という②の、後ろ向きとも思える面に関する役分をとくに担う者であることを明確にしています。ここに決定的に日本での登山論と西欧での登山論、登山の位置づけの違いがあります。

下で述べるように、ヨーロッパアルプスという峻険で非常に危険な山岳を対象とした活動であったれば、危険のレベルも死に対する意識も、日本の山登りとは比較できないほど大きいものがあつたはずで、それにもかかわらず、登山という行為に開拓者たちは突き進んでいったわけです。しかし、ここには、生命の危険への覚悟とは反対に、その行為に対する人

としての社会的責任が生じます。たとえ生命は個人のものであるにしても、社会に対し、人々に対し、命を自在にするような行為は許容されるものではありません。

そこに、安全を確保する方法と決意をなんとしても高らかに示す、ヨーロッパ人としての合理主義（精神論を排除した実証主義）に対する誇りがあります。安全管理および危機管理への取り組み、理論が、私たちの想像を超えるほど強調され、高く持たれてきたのです。

| 9

リーダーシップ（リーダーの仕事）が、「登山の基礎」や「登山の方法」などではなく、なんと「遭難防止」の観点から項目立てされているではありませんか。日本の登山では考えられない構成になっていることに気づかれるでしょう。参考までに目次を掲げておきます。

第4部 遭難防止とその対応（Emergency Prevention and Response）

17. リーダーシップ（Leadership）

18. 安全確保（Safety）

19. 応急手当て（First Aid）

20. 山岳救助（Alpine Rescue）

ピット・シューベルトの『生と死の分岐点』（山と溪谷社）は、ヨーロッパアルプス登山で事故死した事例を取り上げて、山の危険を具体的に、詳細に検証しています。日本では類書がない高レベルの内容で、これが西欧人の指す登山だと言わんばかりの印象を与えます。登山の死を礼賛するような面は全くなく、合理性を欠いたがため遭難死（自身で自分に招いた死）を非情にも物的に、リアルに描いています。そこでは、遺体はすでに物や廃物と同等になっています。著者によって読者も、人間（世界）物質論にいざなわれます。

ちなみに、日本の登山の総合書である『高みへのステップ』（文部省編）では、リーダーは「登山の基本的な考え方」の章に「リーダーとフォロワー」と項目立てされています。彼我における登山の成り立ちや位置づけの違いをここに垣間見る思いがします。リーダーとフォロワーは、登山を成り立たせるうえでの人的要素として扱われ、上に述べた①の登山の目的遂行への論理上の1項に置かれているわけです。

日本で出版された登山の技術書や救助（レスキュー）技術関連の本も何冊か見ましたが、「リーダー」の項目はどこにも配置されていません。日本の登山社会は、リーダーを登山の安全確保の要素として見る目さえ持っていないのです。

◆ヨーロッパと日本で言う、「山」と「リーダー」の違い

登山で安全が強調されるのは、その程度は千差万別であっても、登山とはどこまでも危険と間近に接する行為だからです。しかも、医療施設がそばにはなく、負傷で歩行が困難になった場合などには、他の力を借りて下山するしかありません。他人に迷惑をかけ、他人の力に依存する可能性をはらんだ行為なのです。

しかし、登山の危険性を強調しすぎると、そんな危険な行為はやめればよい、と言われかねません。そのとおりです、本来、自分で招く危険は自分で引き受けるしかありません。しかし、ご承知かもしれませんが、「死が確実なところには行かないが、死の危険性のないところにも行かない」というラインホルト・メスナー（史上初めて世界の14座の超8

千メートル峰をすべて無酸素で登ったイタリア人登山家)の至言に代弁されるように、それだからこそこの登山なのだという意味合いが、登山には本来的にあります。「虎穴に入らずんば虎子を得ず」という諺もあります。どこまでも登山は危険と背中合わせでありながら、それにもかかわらず、いや、むしろそれがあるからこそ、という事の神髄を言い当てているように思います。危険にもかかわらず、その先、その後には、危険をもしのぐ何か（価値と言っていいのでしょうか）があるというのが、登山の持つ不思議なのでしょう。

ヨーロッパアルプスは日本の山よりはるかに険しく、登山の難度もずっと高く、危険も大きいことは述べるまでもありません。ヨーロッパでの登山は、そのような山岳を対象とする活動群として発展したため、登山と言うと、そこには裾野歩き・トレッキングを指す活動群は含まず、もっぱら「クライミング（アルパインクライミング）」が中身となります（図1参照；7月の育成講習で石田さんからもそのような説明がありました）。だからこそ、リーダーの役割はもとより安全の確保をきちんととること、との約束事としての特殊な意味合いがここに含まれていると言っていいでしょう。登山も、登山のリーダーも、特殊で高度なレベルを必須とするのは、そこから生きて帰るための必要条件です。欧米では、リーダーはそのための役割を果たす、という位置づけなのです。

日本では大昔から山が登られていたという歴史があるのは、ヨーロッパアルプスに比肩する山岳地帯がなかったという単純な理由からです。20世紀の初頭から日本に導入された「登山」がそれまでの登山を大きく転換させたのは、大学山岳部を中心に、大正から昭和期にかけて行われた先鋭登山（パイオニア登山）でした。北アルプス・南アルプスに難ルートが切り開かれました。これらはさらに、戦後、先鋭的な社会人山岳会の叢生につながり、またヒマラヤの高所登山やアルプスの難ルート登攀に引き継がれていきます。

このように見てくると、日本での登山は一言で内容を表すのが難しいほど重層的で、多様で、緩やかで、曖昧です。登山のリーダーの役割や考え方の違いも、山そのものの違い、山の登り方の違いに大きくかかわっていることがわかると思います。海外で「リーダー」と言う場合の「冒険的登山」のリーダーを含めて、日本の山独自で発展したであろうリーダーの役割や責務は非常に幅広くて、多様性に富む、と理解されます。それだけ、個々の山でのリーダーの働きの特性を、山岳会はもとより、リーダー自身、そして同行者が正確に把握、認識することが、「身の丈」の登山、「分をわきまえた」登山をすることにもなり、安全の上でも大切だと感じます。山ごとのリーダー、という存在だからです。

5) 各種のリーダー

以上の違いを踏まえた上で、ここからは私たちが普通に使っている日本の登山に即して述べます。単に「登山」と押しなべて言いますが、いろいろな役割や段階、あるいは登り方やレベルなどにおける次のような種類の「リーダー」が存在します（日本山岳会編『登山の技術―上』、白水社、1981、p.36）。

- (1) 登山界のオピニオン・リーダー、いわゆる登山の指導者
- (2) クラブまたは山岳会の指導者で、一定以上の技倆、体力、指揮権を持った人
- (3) 大きな登山隊、さらには細分化された小パーティーのパーティー・リーダー
- (4) 宗教、学校、職場等の中で集団登山のように大勢の人たちを指揮して登山する指導者

私たちの場合には、②～③あたりが当てはまるでしょうが、普通に「リーダー」と言うときは、各山行のリーダーを指す③が最も私たちの登山の実情に合っています。

④に関しては、本多勝一氏（かつて朝日新聞の名物記者）の『リーダーは何をしていたか』（朝日文庫）で知られるように、学校が生徒を、公共団体（の職員）が一般市民を、山岳ガイドが顧客をそれぞれ引率もしくは案内して実施した有雪期登山において起こした山岳事故を詳細に検証し、実施主体（主催者）側の罪状を世に知らしめました。

同行した、より下位にある者たち（被引率者、学校登山では生徒）に対して、命を預かるにしてはさんすぎる登山であり、貧弱な管理体制しかなしていなかった登山の実態が浮かび上がり、安易に無責任な引率登山をしないよう世に警鐘を鳴らしました。ガイド登山の場合は、山岳ガイドの判断の誤りを糺しています。

④に当たる事例としてまだ記憶に新しいところですが、2017年3月27日に那須岳における高校山岳部の雪山訓練で起こした、付き添い教員1人を含む8名（山岳部生徒7名）の雪崩遭難死亡事故について、警察の検証が行われているそうです。雪崩の予知は経験者にも難しいと言われますが、業務上過失を問う刑事訴追の可能性が言われています。

これらの事例は、登山同行者の安全について、その計画段階で時期や行路の設定などの基本設計において最も緊密にリンクする立場にある主催者、その中のリーダーにおける危険への認識の決定的な欠如、不十分な資質や適格性のなさなど、不幸が現実化してしまう条件・状況を洗い出しています。すべきこと（危険への接近・陥入を回避する）をしなかったリーダーの不作为が問題となるわけですが、どの事例も、もともと計画・実施すべきでなかった登山自体に最大の原因が宿っていると感じました。良書ですから、ぜひ一読ください。

§ 2. 登山における「リーダー」の定義

1) 本格的な登山におけるリーダー像

登山を形式によって**単独登山**と**集団登山**の2つに大きく分けたとき、リーダーが問題になるのは言うまでもなく集団登山においてです。本会のような山岳会は集団（または複数人）での登山を常態としますが、単独登山では論理的にリーダーは存在しません。

単独を最小とし、小さな登山（隊）では簡単でも、エクスペディションなどにおいては逆

■リーダーの分化

- ・メインリーダー（チーフリーダー）
- ・サブリーダー（サイドリーダー）
- ・分担別リーダー（業務別責任者）
 - ・旅程（アクセス・移動）、登山での行路（ルート）、登攀、下山、撤収、観光
 - ・装備（テント、生活用具、登攀用具類；それらのメンテナンス）
 - ・生活と食事（食材調達、調理）
 - ・医療や安全確保（レスキュー）、娯楽
 - ・記録・撮影、会計
 - ・通訳やリエゾン・オフィサー（現地統括官）

図3 エクスペディション（海外登山）における登山隊の構成（大まかな構成の一例）

の非常に複雑な構成をとります（図 3）。全体の指揮をとる「隊長（チーフリーダー）」や、ベースキャンプ（BC）から山頂までの間の登攀という最もテクニカルな部門だけを受け持つ隊長（登攀隊長、アルパイン・リーダー）を指すこともあれば、荷揚げやルート工作など兵站面を担う分隊のリーダーを指すこともあります。また、シェルパやポーターたちを統率するリエゾン・オフィサー（ポーターと登山隊との間に立って中間で調整をするその国の統括官）も、その部門での一種のリーダーです。登山が大きくなると、リーダーは、行動部門、行動範囲のどの部分を担うかでその役割も違ってきます。

私たちが通常実施している小さな山行の場合も含めて、登山でリーダーの役割や責任が問題となるのは、リーダーの指示が間違っていて、正しく行路（ルート）どりができていなかった場合や、危険を見落としていた場合などです。また、安全管理（危険予防）面で注意を怠っていた場合などもそうで、個々のメンバーはもちろん、山行パーティー全体に危険が及びます。判断を託したリーダーには、一般メンバー以上の注意義務が課されます。

危険は明らかな行路上のものばかりではなく、生物（有害動物）や天候（荒天、低気圧、低温、落雷、水）、山岳環境（雪崩）など潜在的なものにも及びます。リーダーはこれら多種の危険への対応をすべて把握し、回避しなければいけません。

2）チームの紐帯としてのリーダー

ここで、渡り鳥のことを連想してみてください。集団で渡りを行う鳥たちは、1羽の先導鳥（ボス鳥）に引き連れられて、何千キロという長いコースを飛び続け、目的地に向かいます。そこには、編隊を組むことによって、後列には飛行抵抗が弱まり、そのほか確実な飛翔行路の判断を1羽に託して全体の統一を図るという隊列の効率原則、あるいは成鳥の本能や感覚によって猛禽類からの危険を防ぐ（水鳥はそのため夜中に移動するようです）防衛といった、運命共同体的な側面によるメリットが色濃く込められています。

登山隊は総合された1つのチームとしてまとまって初めて実を上げることができます。それだけ構成メンバーの心身面、さらには内部での協力やマナーの遵守など、必ずしも目に見えない側面も重要です。しかも、それらは、およそリーダーによって原形が作られるという関係にあると思います。それがメンバー間での精神的なつながりを基礎づけ、リーダーへの信頼などとして行動を切り開くことになります。リーダーに託すという底には、その能力・経験への信頼が大切ですが、それ以外のさまざまな人間的条件が関与します。ある程度本格的な登山では日数も多く、参加メンバーにも共同生活上のストレスが生じます。

私たちも信頼のおけるリーダーを選びます。語弊を覚悟で書きますが、ある山行に参加しようとするのは、その山に登りたいと思う気持ちに劣らず、そのリーダーを選ぶ気持ちによ

- (1) 冷静な判断力と決断力を持っていること
- (2) 統率力があること
- (3) 責任感旺盛であること
- (4) 山の危険に対する注意深さと鋭敏な感知力を持っていること
- (5) 人間の心理を読み取る能力を持つこと

るのかもしれないと言っては言いすぎでしょうか。信頼されるリーダーの資質が上掲書『高みへのステップ』に挙げられています（前ページ）。

それ以外にも人間的な資質として、包容力のある柔軟な人間性や、研究熱心さ、山への情熱なども挙げられています。

『処女峰アンナプルナ』の序文に寄せて、リシュアン・ドヴィスが隊長のエルゾグについて次のように記しています。 | 13

「ヒマラヤの勝利は、チームの勝利である。（中略）チームの勝利は、とりもなおさず、隊長の勝利であったともいえるだろう。（後略）
かれは人間のもつ美点を遺憾なく表明してくれたのだ！」

3) 複数者による特殊登山

関連するので、最近の特異的な登山スタイルについて付記しておきます。

①**一般登山** リーダーは単独行（単独登山）では存在しえませんが、その責任などが問題となることもあります。すべてのトラブルはいわゆる自己（個人）責任（自分がマイナスの結果を引き受けること）です。他への義務も責任も生じえないからです。

ところで、近年の比較的若い層が行っている登山は、単独行に限りなく近いスタイルをとっているように見受けられます。従来の登山観からすると理解の範囲を超えるのですが、単なる友だち関係にもなく、登山において協力関係に必ずしもない不特定多数者に SNS（ソーシャル・ネットワークキング・システム）を使って参加を呼びかけ、ある地点（山中の場所や山小屋）に任意に（好きな人だけが）集合するという、共同性を装った、それも登山です。テントを使う登山の場合にも、複数者が特定のテント場に集合するものの、食事や就寝は個々の 1～2 人用テントを使い、生活も個々別々なのです。宴会はどうでしょうか。

このような登山では、誰がリーダーなのでしょう。呼びかけをした人でしょうか。そう考えることもできません。依然としてリーダー不在であることに変わりはありません。詳細な計画もなく、隊の統制や行動の指示もなく、また責任を負う立場の者もないという実態から、そうなのです。今若者たちが行っている登山にあるのは、その企画に参加するかどうかを任意に決める個人です。新たな行動スタイルと考えられます。

②**アルパイン登山** 「アルパイン alpine」という形容詞は、「アルプス」に由来します。エクスペディション登山もアルパイン登山に含まれますが、「極地法」と呼ばれる登山方法に対する「アンチテーゼ」（反対の思想表明）として、かつ新たな意味を伴って高所登山の主流となりました。近年、とくにかつてのような大隊を組み、膨大な物資・人員を投入して行う登山の非道徳性や登山自体の価値を問題とし、これらの登山スタイルを拒絶し、困難で新規のルートを 2～3 人の少数精鋭のアルピニストだけで切り開く、パイオニア登山（上述の本多勝一氏の言葉だったか？）のことです。ここには指示や指揮をする隊長（リーダー）の存在はありません。ザイルを組むメンバー（ザイル・パートナー）が対等の登山者であり、また対等に依存し合い、役割を引き受け合う関係にあります。

③**ガイド登山・公募登山** 海外の高峰を対象に、営業ベースでここ数十年の間に盛んになってきた登山形式です（J.クラカワーの『空へ』で有名になりました）。ヒマラヤ 8 千メー

ル峰の一部（エベレストをはじめマナスルやアンナプルナなど）や、アンデス、アラスカ、テンシャン（天山山脈）のほか、インドネシア、南極などが選ばれています。参加者はそれなりの代金を支払い、旅程などもすべてセットされた登山です。現地人のガイドが付くこともあります。日本人ガイドが登山を仕切るのも、そのままリーダーになります。2014年7月に有志で倉岡裕之さんをお願いしたワスカラン登山もガイド登山でした。

§ 3. わが会における「リーダー」規定

1) 会則上の規定と役割

本会の会則では、「リーダー」を「山行」の職務に限定して置いています。本会の活動は大きく運営面と山行面の2つに分けられますが、「リーダー」はもっぱら山行における役割者や担当者を指すのであって、本来のリーダーの概念からすると狭い範囲に限定されます。

なお、これには相当の理由があります。自由意思で本会に入会し、すべての会員が同じ市民レベルの者で同等であることを前提に、すべての会員は同等の権利・義務を持ち、会を統率するような権限を特定者に与えていないという、発会以来の理念に基づいています。逆に言うと共同運営ということであって、リーダーの人選にもそれが反映されます。

■会則第9条「山行」に掲げられたリーダーの業務や権限・任務

- 2 項：……（不適格な山行の参加者についてリーダーまたは出席者が）例会でその山行への不参加を勧告することができる。
- 3 項：会山行にはそのつどリーダー（およびサブリーダー）をそれぞれ1名置くものとする。（リーダーの仕事）当該山行の計画の段階から下山に至るまでを担当し、山行途上での指示・決定などを行う。ただし、指示・決定は同行者の意思を尊重して行われなければならない。
- 4 項：……事前に山行への参加者に山行の安全のために情報の提供を行う……、必要な装備などについて励行を求める……。
- 8 項：（会山行）リーダーまたはサブリーダーは事前に山行計画を会報で提示するか、または例会で山行計画書を提出しなければならない。……
- 14 項：……山行実施後早急に……山行報告を提出しなければならない。

2) 不文律としてのリーダーの心得

リーダーの役割や任務、心得などがすべて、会則に詳細に規定されているわけではありません。明文化されていなくて、会で申し送られ慣行化されている事項も少なからずあります。その部分をいくつか書き添えておきます。

①会員としての役割の均等化 それぞれで違う登山に対しては、適役としてのリーダーが選任されることは上で述べました。本会では一定レベル以上の、例えば雪山登山などにこれがより厳しく当てはめられますが、平易な登山は、山の会の業務（運営＋山行）をできるだけ多数の会員（原則的には全会員）で均等に担ってもらうという方針のもと、会員歴1年経過後という入会から早期の会員にもリーダーを引き受けてもらうことにしています。経験上、無理があると思われるときは経験者がサブリーダーに就き、リーダーを支えます。こうすれ

ば、リーダーの早期育成にも一役買ってくれる、という期待も持てます。

②リーダー、サブリーダーとフォロワー（参加者）の関係 山行はその山を希望する人がみずから提案する場合と、山行企画係で推薦し計画化する場合の2通りがあります。

リーダーは担当する登山のすべての行程、すなわち山行計画（計画書）を作成して、実施日程の約2か月前の会報に掲載し、そして参加者を募り、登山の実施を決め、実施に移し、下山して解散する一それまでの一連の行程について、進行管理を担当します。さらに、山行後の山行報告の提出（会報とHP）もあります。事務的な業務も多いですが、山行中は行路・進路を細かく決定し、事情によっては変更したりもする判断をします。 | 15

隊の先導はサブリーダーが担うことが多いですが、リーダーが適任者に指名・依頼することもあります。進行（速さ、休憩など）は先頭が管理をしますが、先導の歩速の程度は重要です。通常、リーダーは最後尾（しんがり、アンカー）に着いて進行を見守ります。各メンバーの体調や水分摂取は十分かなど、いくつかのポイントに配慮します。

通常の問題のない登山ではリーダーは最後尾でいいのですが、雪山など特別に行路を開くとき（ルートファインディングなど）や、登攀的な登山が出る箇所では、リーダーがあえて先頭に立ちパーティーを先導します。また、危険な箇所にさしかかったときは、あらかじめ安全地帯で立ち止まり、危険の存在、注意点を後続のメンバーに告げます。安全のために対応が必要と判断されたときは、対応を発動します。

リーダーはもちろん、個々のフォロワー（隊のメンバー、参加者）の性格によっても変わりますが、リーダーの指示に対しては、むやみに異論を言わないのがマナーです。すなわち、自分の考えとリーダーの考え・判断がさほど違わず、どちらもどっちというような場合などは、リーダーの方針を肯定し、黙過するという気持ちを心得ましょう。参加者はリーダーに全権委任したという立場に立ちます。参加するというのがその表明です。

ただし、リーダーの指示が明らかに間違っていたときや問題をはらむとき、判断ミスをしていたとき、あるいは当初の計画から理由のない一方的な変更を告げられたとき、さらにはメンバーに不調者や問題が起こり、それにリーダーが気づかなかったときなど、冷静にフォロワーが反対意見を言い、また指摘してあげるべきでしょう。また、リーダーが未熟で、会の習わしや決まりをよく知らないときや、危険に対する認識が薄かった場合などには、サブリーダーでなくとも、同行者がそつと教えてあげる配慮もあっていいでしょう。

なお、山の初心者や会員歴の短い人がリーダーを担ったときは、適宜、経験者がサブリーダーに就き、リーダーを補佐し、リーダーにそのつどあり方やマナーなどを伝授することもあります。これはリーダー教育として有意義と考えられています。

§4. リーダーの責任

1) 「責任」とは

「責任」とは、自分の意志（故意）で選択し、行ったある行為のマイナスの結果に対して、相応の扱い（不利益、賠償、制裁など）を当人が引き受けることを言います。倫理的責任、道徳的責任、道義的責任、政治的責任、社会的責任などいろいろな責任がありますが、登山で重要なのは狭義の法（律）的責任と同義的責任です。

法的責任は法律で決められた規定に違反したために好ましくない結果を生み出したことに対して、あらかじめ決められている基準（法律の規定）に基づいて受ける責めです。民事責任と刑事責任に分けられます。民事責任は違法な（法律に背いた）行為によって他人に与えた損害を金銭で償う対個人の責任で、刑事責任は違法な行為により社会の秩序を混乱させたことについて受ける社会的な制裁です（『法律学辞典』有斐閣）。

2) 集団登山において生じうる責任

①自己責任の原則

では、登山で言うとき、「責任」とはどのようなこと、どのような場合を指すのでしょうか。登山に関する特別の法律はありませんが、登山が危険をはらむ世界にあえて身を投じる行為であることは、再三説明したとおりです。その限りで、個人の自由な意志で、危険を承知で選択した行為だから、その結果に対して他人が責任を負うという関係にありません。これを「自己責任の原則」と言っています。自分の考えで出した結果には自分だけが責任を負う、という原則です。本会でも、その原則を会則で規定しています（第9条9項）。

とくに単独登山での遭難事故に関して当てはめられることが一般的なようですが、集団による登山でも、経験・技術などの不十分な人たち（パーティー）が危険な登山を行った結果起こした遭難に対しては、社会は「自己責任」とか、「(気の毒だけど) 自業自得だ」というような批評的な目で見えるものです。登山の法律問題を扱った『登山の法律学』（溝手康史、山と溪谷社）でも、集団登山の場合も、個人が危険への了解を介して参加している点を重く見て、おおよそ起こした個人に帰責とする自己責任の立場に傾いた解釈をしています。

②登山における注意義務

先に挙げた『リーダーは何をしていたか』で紹介した、複数人での登山（パーティー登山）において発生した遭難事故に関しては、主催者（側）やガイドの明らかな落ち度や不備が指摘されています。主催者側はリーダーの立場に立ちます。事例のうちのいくつかは、計画すべきではなかった、また計画するような資格もなかった、でたらめなものでした。

ところが、そのような登山実施前から存在した明らかな原因がなくても、事故は起こることがあります。多くの遭難事故が、道迷いを筆頭に、転倒・転落・滑落などの様態で、あるいは雪崩遭難などとして起こっています。それらは、自身が不注意で起こす場合もあれば、もらい事故（同行者間、または関係がないパーティー間での落石事故、接触事故など）ということもあるでしょう。また、行程中におけるリーダーの指揮・判断の誤りに起因するものもあれば、危険の予見困難というケースもあるでしょう。

登山パーティーの個々人全員がそれぞれ自分自身について怠りなく注意を貫徹していれば、普通の登山パーティーで事故が起きる確率はゼロに近いでしょう。他方、ある場合にはパーティーの運命を決めることになるリーダーには、自分だけへの注意以外に同行者への注意、パーティー全体に対する注意が求められます。これが、「リーダー責任」と言われるものです。リーダー責任は、本来リーダーが守るべき基準（注意義務）を履行していなかった場合に負う責任です。

■注意義務とは

自動車の運転では、歩行者や自転車運転以上の特別の注意義務が運転者に課されます。大

きな車、また乗り合いのバスなどは、さらに大きな注意義務が課されます。このように、ある行為をする際に注意をしなければいけない一定の義務を「**注意義務**」と言います。

登山のリーダーに関する注意義務内容を見てみると、登山で事故を起こさないように、計画段階から発生し、行路（ルート）の選定、装備・食料の備え、そして実際の登山での危険への対応など、多岐にわたります。危険への対応は、危険の認識、予見および回避に分けられます。注意義務に違反していた場合を「**過失**」と言い、いずれかが事故と相当の因果関係があるとなれば、リーダー責任（**過失責任**）が問われる可能性があります。他方、危険の認識が難しい雪崩や落石、落雷など外部の原因による場合は、不可抗力と言います。

| 17

要求される注意義務の程度は、行為の内容によって変わりますが、①「善良な管理者の注意」と②「自己のためにすると同一の注意」に分けられます。①は事務や作業の中身（登山のレベルや難度など）に応じますが、その職業や地位（登山のリーダー）にある人として普通に要求される程度が基準とされます。②は、自分のことを処理する場合に用いる注意の程度です。危険度の高い登山では、リーダーには注意義務が荷重されます。

ところで、1つの登山パーティーをなすにも、メンバーの経験・技術力や体力は異なります。もし登山の初心者や、そのレベルの登山は初めてというメンバー、不適格なメンバーが加わっていたとしたら、その人の危険度はパーティー構成メンバーの平均値より大きくなり、その人に対する特別の注意義務が生じると考えられます。プロの山岳ガイドが登山客を案内して事故を起こした場合は、専門家としての社会的期待値が高く、通常の登山パーティーのリーダー以上にリーダー責任が強く問われますが、それに似て、メンバー間に大きな格差があった場合は、リーダーにはより大きな注意義務が課されると考えられます。

山岳会で行う私たちの登山は、年間を通して、繰り返し行うもの（業務）なので、「**業務上の過失**」と言って、リーダーの過失に関しては一般の過失よりも責任は重くなります。業務とは「社会生活上、反復継続して繰り返される仕事をいい、公的なものであると私的なものであると、主たるものであると従たるものであると」を問わず、また報酬・利益があるなしにかかわらない、とされます（大塚仁『刑法概説（総論）』、有斐閣）。

山岳会員も経験を積んでいき、同一とみなされるレベルになると、法律的にリーダーの特段の注意義務が問われることはないと言われます。上に述べたように、登山が自覚ある危険行為だからでもあります。しかし、登山道のすぐ近くには危険地帯が無数に存在しています。ちょっとした箇所と思わないで、「気をつけて」といった一言を発するなどの注意喚起は、リーダーでなくとも同行者の気持ちしだいであって、道義的な態度と言えるでしょう。その気持ちがパーティー内の空気を和ませ、いい山行にもつながっていくでしょう。

リーダーの注意義務については、本会の HP で 2 回に分けて詳細に紹介しています。「登山者の注意義務」「登山における注意義務」で直接、検索できます。

【後記】結果的にずいぶん長い講習資料になってしまいました。登山のリーダーについて書かれた 1 冊本はありません。せっかくの機会なので、多方面の観点を盛り込んで、一通り「リーダー論」として仕上げました。参考にしていただければ幸いです。